

山野草は人によって「雑草」になる。人間社会が2021.7.3~7.9

今週の

倫理

7月のテーマ | 万象我師

草世草心 芥川

1236号

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所第二代理事長・丸山竹秋（一九二一—一九九九）のこぼれ話を掲載いたします。

この地上に、雑草というようなものはない、と知ったときは、大きなおどろきだった。そして喜びであった——。

富士山麓に住むようになってから、ある日、近くの御胎内公園（清宏園）の園長である池谷貞一さんと話しているうち、ふと、私は足もとの草に気がついた。

その一本を引きぬいて、「これはなんという名でしょうか。いろいろな雑草があるようですが……」とたずねた。池谷さんは、その草を一目みるなり、「これはヒメジョオンですね。いろいろな山野草がこのあたりには多いですよ」とこたえた。

——山野草！

私はビクツとした。そうだ、山野草。山野に生えているから、まさに山野草なのだ。雑草ではないのだ。

それまで私は、このヒョロ高いような（三十〜五、六十センチくらい）、どこにでも生えている青い草を、つまらぬ雑草だと思いつてなかった。しかしそれにはちゃんと名がついていて夏から秋のあいだに、白または淡黄色の美しい花をひらくキク科の植物なのだ。北アメリカ原産で、一八六五年ころ日本に渡来し、今ではどこでも野原や道ばたに生えているという。それは雑草などと呼ぶべきものではないのだ。



雑草というものはない

丸山竹秋

そもそも「雑草」とはなんだろう。例によつて辞書をひいてみると、——栽培する作物以外の種々の草、役にたたない草。など出ている。

栽培するもの以外を雑草というのはわかるけれども、いったい、この世の中に役に立たない草というものがあるであろうか。名もそれらにも名はあるのであるが（もちろんそれらにも名はあるのであるが）生えていなければ、山や野が荒れて水不足の原因になることもある。

——私はそれから雑草といういいかたは、二度と使わないことにした。道ばたの役には立たぬ草などはないのだ。どの葉もどの茎も、みなそれぞれすばらしい個性をもつたりつばな草なのだ。

このことに気づいてからというもの、私は道を歩くのがとてもたのしくなった。

多摩川べりなどでは、食用の草をつんでいる婦人もあるというのだが、車のゆきかうビル街のまんなかで、だれにもかえりみられることなく、ひっそりと生えている野草は、なんともいえぬあわれさをもなう一方、大自然の活力の一端を示されているように、心づよくも思われた。

山野にあつては草がたのしく、都会にあつてはまた草をみつける——その楽しみがふえて、（ここにもわが友がいるぞ）と、ほえまらずにはおられない生活が、私のまわりには広く展開してきた。

（『よるこんで生きる』より）

七月一日「感動し受けるもすもす」